

## 文献案内

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』（思文閣出版、二〇一九年二月）

本書はタイトルに示されるように、様々なタイプの琉球船および首里城・那覇港を描いた作品を網羅的に集めて高精細のカラー図版を収録し、作品解説と一〇本の論考を付したものである。「琉球船」「首里・那覇」「首里城」「那覇港」「薩摩」「中国」と六題に分けられ収録された作品は、ガラス乾板・模型の写真も含めて計六五点。その他に「参考図版」として地図二葉、および二〇世紀前半期までの、今や失われた景色をうつした古写真を二五葉収める。

収録作品は一九世紀を中心とし、一部は一八世紀、二〇世紀のものも数点含む。所蔵者・所蔵機関は沖縄県を中心に全国に及び、海外機関としてベルリン民族学博物館も見える。編者である研究会の博搜ぶりが窺える。見開きB3という大判サイズ、かつ二〇〇頁近くのボリュームを誇る本書は、物理的には持ち扱いづらい本であるが、それだけに収録された図版は相当細部まで鮮明に見え、多くの所蔵機関に分散した史料をまとめて鑑賞することが可能である。図中に書き込まれる多くの文字も、肉眼で厳しくても拡大鏡を使うと、ばけずに読めるものが多く、また作品に付された落款類は「収録史料落款一覧」として法量・印文などの一覧表が作られ、改めて画像も載せられている。総じて収録作品を史料として研究するために必要な情報となるべく落とすことのないようにという配慮が強く感じられる仕上がりとなっている。

「首里・那覇」「首里城」「那覇港」という分類からも見て取れるように首里・那覇を一体として描く作品が多いことは、首里城と那覇港の歴史的関係を端的に表している。収録論考のうち藤田励夫論文はこれらの作品を那覇港が左右どちらに開いているか、どんな船が描かれているかという視点から系統分類を試み、豊見山和行論文は「琉球交易港図屏風」を読み解いて本図を含む五点の首里・那覇を描く屏風（いずれも本書収録）の制作年代を一八三八―四四年と絞り外圧が始まる直前の祝祭感溢れる作品として位置づける。複数作品の差異と類似から時代の変遷を読み取った分析の後追いが容易にできるのも作品を高画質で集めた本書ならではの強みであろう。（須田牧子）

『日本近世生活絵引』琉球人行列と江戸編編纂共同研究班編『日本近世生活絵引 琉球人行列と江戸編』（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、二〇二〇年三月。神奈川大学芸術機関リポジトリで公開）

嘉永三年の琉球使節行列を描いた「琉球人行粧」二巻と、行列が通る江戸の町の賑わいを描いた「琉球人往来筋賑之図」一巻を対象に、絵引を作成したもの。すなわち、この三巻一組の絵巻に「描かれた事物・行為に番号を振り、それらを表現する「一般名詞」を付し」ている（本書凡例）。また、「参考資料」として十二点の絵図等を、「解題と考察」として十本の論考を収める。

ところで、本書刊行直前の二〇二〇年二月、長らく所在不明だった「琉球人行粧」巻一の原本が発見された。発見当時は校正の最終段階であったため、原本から得られた知見は本書に反映できなかった由で、絵引も巻一は写本によって作られている。そのかわり、本書では「付録」として、巻一原本の画像を紹介している。新発見の原本をただちに紹介した意義は大きい。

さて本書は、本絵巻を初めて総合的に研究した書として評価できる。実は、本絵巻の研究条件が整ったのは最近のことで、二〇一七年七月に、丹羽謙治「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』について」（『雅俗』十六号）によって、絵巻の作者上月行敬が、宇和島藩士であることが指摘された。従来作者は薩摩藩士と考えられがちであったので、丹羽論文により、初めて本絵巻を適切に位置づけていく道が開かれたのである。これを踏まえて、本書は改めて絵巻全体を検討し、絵巻に対する知見を深化させている。

その成果のごく一部を紹介すると、行敬は全くの素人ではなく、何らかの絵画的訓練を受けたものであること（一八三頁）、描かれた内容には他の文献や絵図、発掘の成果と一致する点があり、描写の正確性が指摘できること（二〇二頁等）、一方で、行敬は故郷の子どもたちに江戸の様子を伝えるために本絵巻を描いたので、彼らに見せたいものが選択的に、時に現実を越えて描かれていること（一四三頁等）等である。他にも興味深い指摘がなされており、今後本絵巻を検討していく上での基本文献になるだろう。

（畑山周平）

黒田智・吉岡由哲編『草の根歴史学の未来をどう作るか これからの地域史研究のために』（文学通信、二〇二〇年一月）

金沢大学・同大学院の社会科学教育コース等に学び、初等中等教育に携わる現職教員を中心とするメンバーによる論文集である。全体は「絵画史料を読む」「寺社縁起と奇談」「歴史史料の可能性」の三部に分かれた、多数のコラム等を織り込む。ここでは第一部の六論文のみを紹介する。

山野晃「鎌倉公方の天神像」は、金沢市西方寺所蔵「鏡天神」の賛文の読解と同図像系統の作品調査から、応永二十年代後半に鎌倉での制作、発注者には足利持氏周辺を想定し、背後にある政治的な緊張関係に論を及ぼす。

市河良麻「『遊行上人縁起絵』の手取川」は、白山市の手取川を二祖他阿に率いられた時衆が渡る場面を対象として、流路の変遷、時衆の信仰拠点、白山信仰などから、地域の信仰の重層性を見出す。

木村直登「なぜ泥棒は風呂敷を背負うのか」は、『七十一番職人歌合絵』の「蔵回」の職能の確認から、担ぐ「大袋」を介して中世の「剥ぎ取り」や近世の古着商の創始伝承、唐草風呂敷の泥棒姿へ連なる盗人イメージを追う。

岡田彩花・鳥谷武史「前田利常の鬼子母神」は、金沢市真成寺蔵の鬼子母神・十羅刹女の木像について、天和二・三年の像背墨書銘を手がかりに利常遺臣らの追慕と、利常生母の寿福院の日蓮宗信仰の伝承を紹介する。

高澤克幸「新発田藩主の肖像画」は、菩提寺に伝わる溝口家歴代藩主の肖像画一三幅の考察で、藩祖像の制作契機や絵を得意とした藩主による画像の分析、あるいは形式の踏襲や修復など、家の連続性の視覚化を跡づける。

吉岡由哲「肖像写真の胎動―久田佐助コレクション」では、一九〇三年に沈没した青函連絡船東海丸の船長久田佐助の旧蔵資料の古写真を扱い、撮影者・撮影時期の検討を行うとともに、軍神的に祀り上げられる経緯をたどる。

総じて地域の作品を掘り起こし、歴史学的な位置づけが試みられる。多忙な学校教育の現場でも、自らが調査・研究の主体となった経験は、受け売りではない教育の実践者としての支えとなるだろう。

（藤原重雄）

江村知子「ライプツィヒ民族学博物館所蔵「四条河原遊楽図屏風」について」（『国華』第一四九〇号、国華社、二〇一九年十二月）

表題作品（以下、ライプツィヒ本）は、東京文化財研究所による在外日本古美術保存修復協力事業の調査によって近年確認された二曲一隻の屏風である。本稿により四条河原町遊楽図の作例に重要な一本が加わったことが周知された意義は大きい。

明治期にお雇い医師として京都で活動したハインリッヒ・ボート・ジョイベの旧蔵品として独逸に渡ったライプツィヒ本の経緯、同画題作例における本作の位置づけの後に、近似する既知の代表的二作品、個人蔵本（二曲一隻）・静嘉堂文庫美術館本（二曲一雙）との関係を、構図や描写表現から検討する。その過程で三作品には共通点・相違点が複雑に混在することを明らかにしてゆき、共通して参照されたであろう粉本（線描と推定）の存在を浮かび上がらせている。比較検討の対象が増えたことで、描写内容は勿論のこと、相互の関係性や画面構成といった製作の工程や意図についても考察の幅が広がってゆく様を理解することが出来る。

個別に着目する描写内容は各芝居小屋・三味線・河原の茶屋とその周辺・灸の跡など多岐にわたる。芸能史に関わる描写からは、定説とされてきた解釈に一石を投じ、多様な形態が併存した可能性について触れる。また、喉元に命中した矢から流血する人形浄瑠璃の様子などは、絡繰りの仕組みといった文献史料との関連も期待できるだろう。御幣軸木の印や無地のままで描かれた看板など、今後の謎解きが待たれる表現の紹介も興味深い。

医師ジョイベも注目したのではないかと思われるのが、民間治療の灸の跡である。こうした肉体労働者の細部描写に向けられた視点を通じ、筆者は四条河原町遊楽図が美しいものの、楽しいものを描くにとどまらず、老若男女の普段の生活実態をしっかりと盛り込んで作成されたところに特徴があると述べる。

終盤では個人蔵本が襖絵として作成されたとする説について反論し、二曲屏風としての本画題の受容について触れる。次なる課題として、個人蔵本と同系統の別本の存在についても言及しており、続稿が待たれるところである。（三島暁子）